東アジア5都市調査から読み取れるもの

白梅学園大学学長　無藤　隆

本稿では、調査結果を辿りつつ、日本の結果をそのなかに位置づけて、日本側にとっての意味をとらえたい。以下、調査結果から出発しつつ、なるべく考察の可能性を広げるように踏み込んでみたい。

1．東アジアの国・地域での調査の意味

幼児とその親を囲む育児・幼児教育状況を検討するにあたり、日本、韓国、中国、台湾の4つの国と地域の5都市で調査を行うことの意義を述べよう。とくに、その大都市圏の現状である。

これらの国や地域は何より、広義の儒教文化圏に属し、家族・親族の関係を重視している。また、読書を尊重する態度が強く、活字文化が古くから普及し、また小さい時期からの学習を大切にしているといってよいだろう。言語体系は異なるものの、漢字を基本にしている点が共通である。発音に比較的よく対応する文字は日本語のかな文字や韓国のハングルのようによく使われるものもあり、中国の注音符号のように入門期にのみ使われるものもあるが、どの国・地域もそれぞれがこのような文化を利用し、幼児期から習得が始まる。算数の教育では、どの言語も10進法を基本にしている点も重要である。

近年の歴史的な違いはあるものの、経済的発展は日本が先行しつつ、他の国も急速に追いついてきている。韓国・台湾とともに、中国の大都市部では経済的に豊かな世帯も増えてきた。義務教育はほぼ普及していることに加えて、幼児教育・保育の普及も進み、就学前教育はほとんどの子どもが受けるようになり（中国の農村部の普及はこれからの課題であるが）、質の向上が問題となっている。また、都市化に伴い、急激な少子化が進んでいる。中国の一人っ子政策はもちろん、東アジアのどの国も極端な少子化社会となっており、小さい時期からの教育への投資は極めて盛んである。メディアの普及も著しく、テレビはもちろん、インターネットやテレビゲームも家庭で多く利用するようになりつつある。

国・都市間の違いはいろいろな点にある。政治的制度の相違はとくに社会主義国である中国とその他の国の間にある。また経済的な発展のずれもあり、日本が先行するなかで、世帯あたりの平均収入の差はまだかなりあるが、どの国も豊かな層をみると、かなり近いレベルにあるといえる。また、核家族化の度合いは日本が進んでいるが、他の国も次第にその方向に進みつつある。

ある程度一定した文化的違いとともに、このように経済的な発展のあり方や程度、また社会的

政治的体制の違いなどが本調査の回答の背景にある。だが、とくに幼児期のしつけや教育において共通性がかなりあることも確かである。小さい子どもを育てるということは普遍性があることなのかもしれないし、また先ほどから述べてきている広義の文化的伝統の基盤を共有しているということもあるのだろう。

2．生活の時間

幼児の一日の生活の時間のあり方は多少の違いはあるものの、共通性が高い。幼児が毎日必要とする睡眠時間や食事のあり方がそう大きく変わるはずもないから、当然かもしれない。また、ほとんどが幼児教育施設に通っているため、その意味でも、共通になりやすい。ただし、とくに北京・上海の幼児園は朝から夕方ないし夜までの長い時間サービスを提供していることが多く、朝食や夕食も提供することもある。

幼児は、朝は7時前後から8時すぎくらいまでに起き、夜は8時半から10時半くらいまでに寝ることが多い。東京の子どもは比較的早く起き、早く寝ている。とはいえ、たとえば寝るのは夜9時頃が多い。さらに、10時以降に寝る子どももある程度いる。昼寝をしていることが多いにしても、とくに、ソウルや台北は遅くまで起きている子どもが多い。

習い事をみてみると、北京、上海では幼児園内で行われていることが多く、ソウルでは家庭教師が多い。いずれにせよ、どの都市も習い事をしている子どもはかなり多く、東京では4歳児で半数、5歳児で7割となる。その内容は東京はスポーツ系が比較的多く、北京、上海、台北は絵画・音楽などの芸術系、ソウルは学習誌が多いようである。いずれの都市でも英会話に通っている子どもが多い。

家にあるもの、たとえばテレビ、絵本、ワーク、CD、テレビゲーム、パソコン、学習機器などの使用頻度をたずねてみると、絵本はどの都市でも使用頻度が高い。東京はテレビ視聴時間が長く、またテレビゲームの使用頻度が高いが、ワークや学習機器は低い。パソコンの使用頻度はソウルがとくに高い。

このように結果を概観すると、幼児の生活については共通性のほうが印象的である。家庭にいて、また幼児教育施設に通う。習い事をする。テレビを見て、絵本を読み聞かせてもらう。

しかし、そのなかでも、とくに、幼児教育施設の時間の長さは北京や台北に著しいし、ソウルでは家庭教師が盛んである。東京の幼稚園は午後3時前くらいまでで、保育園は午後6時前くらいまでであり、家庭に親子が揃う時間は比較的に長い。

東京でも早期教育は盛んではあるが、極端に走っているとはいえない。家庭での活動で学習の占める割合もあまり高くない。幼児期には体を鍛え、基礎力を身につける時期であるととらえられているのであろう。とはいえ、英会話などの習い事が増えてきているように、あるいは変化も生じているのかもしれないのだが、それもまた直接、すぐに小学校教育に役立てるというより、おそらくもっと長期的な先を考えてのことであろう。

3．母親の意識

母親の意識は、文化による子育てのあり方への伝統的意識に規定されつつ、現代の暮らし方や男女の共同参画の進展の影響を受けていることだろう。親と子のつながりを大事に、子育てに時間とエネルギーを親が割くことを当然としつつ、社会主義圏の家庭では父母ともに子育てにかかわりつつ、同時に、幼児教育施設に任せる部分も高い。一方、東京、ソウルでは専業主婦の占める割合もかなり高いが、近年、女性の社会進出の動きも強くなっている。

どの都市でもある程度共通に、「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と考える母親が多い。同時に、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と思っている。また、「子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う」と大多数の母親が回答している。その際、子どもの自主性を重んじるのが多数である。東アジア圏の大きな特徴として、幼児期の教育の重要性への意識があり、かつ家庭教育を重視しているといえよう。

幼児の教育への考えの相違点もある。厳しく叱りつけるのはソウルであり、わかるまでやさしくというのは北京、上海、台北であり、東京は中間である。文字・数は関心を持つようになってから教えるのが東京であり、台北、上海、北京は早めに教える比率がある程度高い。

子どもの将来の学歴への意識はとくに都市による違いが大きい。東京は大学進学や学校名にこだわらないが、とくに北京、上海、台北はそこにこだわる。中国での学歴の重要性は経済の高度成長の段階の特徴かもしれない。逆に、日本はそのような時期を過ぎて、ある意味で成熟してきているのだろう。

子どもが将来どのような人になってほしいかという期待ではかなりの違いがみられる。東京は友人・家族・世間などの人間関係に回答が集中している。東京以外では「自分の家族を大切にする人」がとくに高い。また、北京、上海では「仕事で能力を発揮する人」と「まわりから尊敬される人」、台北では「仕事で能力を発揮する人」とともに「社会のために尽くす人」、ソウルでは「リーダーシップのある人」と「精神的に余裕をもってゆっくり生きる人」を望む比率が高い。全体に家族志向が強いが、東京ではそれに加え、友人や集団への適応が重視されている。他の都市では、「仕事で能力を発揮すること」「社会のために尽くすこと」「リーダーシップがあること」なども強調される。

今、子育てに力を入れていることでとくに比率が高いのは、東京は「他者への思いやりを持つこと」と「基本的生活習慣を身につけること」が突出し、台北ではそれらに加えて文字・数・外国語に力を入れている比率が高い。芸術系については東京では低いが、台北、ソウル、北京、上海ではかなりの比率がある。東京では、幼児期は人間関係や生活の基本のしつけの時期であるというとらえ方が強い。早期教育の発想は他の都市より比較的薄い。

大学進学への期待は東京以外では大学院までをも視野に入れる比率が高く、大学院が就職のために意味がある事情がうかがわれる。また、東京では進学期待に男女の差がいまだにかなり大きい。

子育てへの意識（肯定的・否定的な感情）はどうであろうか。どの都市の母親も子どもをかわいいと思っている。また子育てにより自分も成長していると感じている。子どもが育つことへの不安・心配の項目で東京が全体にやや高い。母親の子どもの成長への満足度は高いが、現在の生

活満足度は東京でやや低めである。東京では子育てへの満足度は大変に高いものの、不安もある程度みられることがわかる。

以上、子どもへのかかわりや満足度などはどの都市も高いが、東京では必ずしも幼児期の就学準備への志向が強くないことと、学歴志向が薄れてきたことがわかる。それは社会が全体として成長を目指す経済から離れたことによるのかもしれない。また、人間関係や集団の志向がかわらず強いことと男女差が大きいこともみられる。

4．父親のかかわり

父親の普段の日のかかわりを尋ねたところ、父親の帰宅時刻は東京が最も遅い。半数以上が21時以降に帰宅している。子どもと毎日一緒に遊ぶ比率もかなり低い。日頃の家事への参加も少ない。「子どもをお風呂に入れる」比率は東京が多いが、これは風呂に一緒に入るという日本の習慣によるのだろう。なお、父親が「子どもを叱ったり、ほめたりする」のはどの都市でも比較的高い。

母親は父親のかかわりについてどのように感じているのだろうか。家事参加への満足度にはあまり都市間の差はない。ただし、「ぜんぜん満足していない」比率が東京では２割ほどあり、他の都市よりも多い。育児参加についてはどの都市も満足度がかなり高い。

東京では、家庭による差はかなり大きいものの、父親の日頃の子どもや家事へのかかわりがかなり低い様子がみられる。だが、その割には必ずしも父親のとくに育児へのかかわりについて、母親の満足度は低いわけではないし、さらに父親に育児にもっと参加してほしいかについて「とてもそう思う」比率でみると、他都市ほど参加を求めているとは言えない。もっとも、土日での父親のかかわりが大きいのかもしれないし、一部の家庭では父親の参加へのあきらめもあるのかもしれない。

5．子育て支援

母親が不在のときに子どもの面倒を見てくれる人についての比率が、どの都市も「祖父母や親戚」が突出して高いが、次いで、東京は「父親」の比率が他よりかなり高い。保育園・幼稚園などの利用もある程度ある。近所の人に預けるのは東京、ソウルで、ベビーシッターは上海、北京、台北で１～２割程度行われている。

東アジア５都市共通に３世代のつながりがいまだに強固であることがうかがえるが、それに加えて、東京は核家族での対応が強い。また、他の都市と比べると公的支援がある程度あることがわかる。

6．まとめ

今回の東アジア５都市の調査から、日本（東京という大都市圏であるが）の幼児期のしつけと教育の特徴が浮き彫りにされる。

１つは共通点である。共に、家族志向が強い。子どもを大事にし、子育てに満足感を感じ、また教育の意義を信じている。

力点の相違もある。日本は、学歴志向が総体的にかなり薄れている。幼児期自体も学校の準備というより、もっと基礎的長期的な発達の支援を心がけているようである。人間関係を育てるという意識がとくに強い。実際にそのことのほうが日本の社会では重要なのかもしれない。

家庭ではテレビを中心にメディア接触が多く、他の都市ほどではないにしても、夜遅くまで起きている子どももいる。テレビゲームの浸透も進みつつある。

父親のかかわりが（平日について）日本は低い。父親の帰宅時刻が遅いのである。家事や育児へのかかわりも少ない。とはいえ、母親の満足感がさほど低いとはいえないが、ただ、母親の育児への不安はやや高い傾向がある。

以上、東アジア圏が基底に共通の文化的要素を持ち、また幼児を育てるという特徴、さらに現代の経済と社会や技術の高度化のなかで、幼児のしつけや教育がかなりの共通性を持っていることがわかる。しかし同時に、その伝統や現在の経済・社会のあり方により違いも多々あり、そのなかには日本の社会性の重視のようにかなり強固と思われるものもある。また、日本の父親の長時間の労働のように、むしろ時代の変化によって変わりうるものもあるように思われる。